

#2

South Sudan

南スーダン



スポーツで平和をつくる

世界で最も新しい国、南スーダン（2023年 9月現在）。20年以上続いた内戦の末ようやく2011年に独立を果たしたが、その平和は長く続きませんでした。繰り返される紛争で、国民の3分の1にあたる450万人が国内外避難民となり、「アフリカ最大の難民危機」とも言われています。そんな南スーダンで、国際協力機構（JICA）の支援により2016年から毎年行われているのが、全国スポーツ大会「国民結束の日」。脆弱な社会基盤、劣悪な社会経済状況により開発ニーズの高い南スーダンで、なぜ「スポーツ」なのか。南スーダンのスポーツを通じた平和構築、そして「フリーダム・ブリッジ」(Freedom Bridge)について紹介します。

（記事内の写真は全てJIN提供）





南スーダンの スポーツを通じた 平和構築

独立後初の 全国スポーツ大会

長年内戦が続いていた南スーダンは2011年にスーダンから独立し、世界で最も新しい国となった。しかし、独立後も国内で民族同士が対立し、2013年には大きな紛争が勃発。和平合意を経て暫定政権が樹立したが、多くの若者が武力衝突に参加したこともあり、治安の悪い状況が続いていた。この状況を変えたいと南スーダン政府の文化・青年・スポーツ省が2014年にJICA南スーダン事務所に「国民として結束し、民族や地域を超えて交流する全国スポーツ大会開催」に対する支援について相談し、2016年に独立後初の「国民結束の日(National Unity Day : NUD)」を開催。以降、毎年開催されている。大会期間中、参加者は地域や民族も関係なく寝食を共にし、スポーツ試合以外での交流も活発に行われ、南スーダン国民としての結束を深めている。

南スーダン初の オリンピック参加

NUDで活躍した選手は、オリンピック・パラリンピック代表選手としても活躍している。2015年に南スーダン・オリンピック委員会が設立されたものの、2016年のリオオリンピックの直前に大規模な衝突が発生。しかし、JICAの支援もあり、南スーダンとして初となるオリンピック参加を実現した。南スーダンを国として世界に認知させるだけでなく、国内の若者に希望を与え、平和や国民の結束の必要性を多くの人々に訴える結果となった。



※プロジェクトの詳細はJICAの「プロジェクトストーリー漫画版」でも読めます

ボールの蹴り方を教えるより 大切なこと

南スーダン独立後初の全国スポーツ大会開催にあたりコンサルタントや専門家も活躍しています。今回インタビューをさせていただいたのは、その中の一人である株式会社JIN代表取締役の大野康雄さん。2015年の開催準備当初から関わるスポーツ大会や開発コンサルタントとしての仕事について話を聞きました。



女性や障害者も躍動した第7回NUD

「彼は自分の人生を賭けていましたから、そこまでやるなら私も付き合おうと思いました。今でも彼は南スーダンスポーツ大会の父と呼ばれています」と大野さんは言う。彼とは、南スーダンのスポーツ支援の発端となった元JICA南スーダン事務所長の古川光明氏^{*1}のことである。大野さんいわく、「古川さんはパッションの塊。南スーダンのスポーツ大会開催とオリンピック参加に尽力した第一人者だ。」「結局は、どこまで寄り添えるか、一緒に歩めるかだと思っています」。そう語る大野さんの目の奥にも「パッションの塊」が光っていた。

大野さんは、2015年の準備段階から南スーダンの全国スポーツ大会「国民結束の日(National Unity Day : NUD)」に関わるメンバーの一人だ。南スーダンの平和づくりを目標に掲げているNUDは、JICAの技術協力プロジェクト支援により2016年から開催されている。慢性的な紛争状態ともいえる南スーダンでは、他の開発途上国の例に漏れずスポーツに対する国家予算は乏しい。インフラも整っておらず、大規模なスポーツ大会の運営経験を持つ人材もいなかった。

そんな中、前述のJICA南スーダン事務所の古川氏を中心とする日本チームが、一丸となって南スーダンスポーツ省をサポートして実現したスポーツ大会、開会式でのプラスバンドの生演奏や誇らしげに行進する選手たちの姿に、「この国がよくこれだけ立ち直ったと、熱い思いがこみ上げてきました」と大野さんは振り返る。

今年のテーマは 「女性のスポーツ参画」

2023年3月には7回目となるNUDが開催された。テーマは「女性のスポーツ参画促進」。南スーダンでは男子のスポーツは比較的メジャーだが、女子スポーツはマイナーでチャンスも少ない。事後アンケートによると、NUDに参加するために地方の空港まで来たが父親が迎えに来て引き返した女の子もいた。首都に女の子一人で行かせることの不安や、「スポーツより家事や勉強をした方がいい」という考えがあるからだ。

女性もスポーツ参画促進というテーマが決まる前、ウガンダの「TICA Dカップ」^{*2}、タンザニアの「レディイスファースト」^{*3}にNUDの南スーダンスタッフを派遣した。そこで彼らは女性のスポーツ参画の意義を認識し、南スーダンに帰国。反対意見も多くあったが、説得して今回のテーマが決定された。

大野さんらコンサルタントの仕事内容は多岐にわたり、大会開催前は特に多忙を極める。どんな状況でも最も大切にしていることは、信頼関係だ。「信頼を醸成するには、こちらが一方的に決めないことを意識しています。情報は全て共有しますし、尊敬の念を持って接します。JICA側もカウంటerpार्टそれぞれの事情も理解しているつもりなので、粘り強く解決法を探し、チーム一丸となってプロジェクトを進めています」。

*1 「スポーツを通じた平和と結束 南スーダン独立後初の全国スポーツ大会とオリンピック参加の記録の著者でもある」
*2 150万人以上の難民を受け入れるウガンダで、難民とホストコミュニティの混成チームを含めた女子サッカーチーム「レディイスファースト」が主催。JICAウガンダ事務所、ウガンダサッカー連盟(FIFA)、ウガンダサッカープレミアリーグ所属のソルティロフライスターズ、認定NPO法人テラルネットワークスの共催
*3 スポーツを通じた女性の社会的地位向上やエンパワメントと選手の発掘育成を目的に、同国出身の元ラソン選手、ジジュ・マイカンガさんが発起人となり、2017年にJICAとタンザニア国家スポーツ評議会が始めた、国内初の女子陸上競技会



大野 康雄 さん

青年海外協力隊(稲作)、青年海外協力隊調整員、JICAジュニア専門員、JICA専門家を経て、開発コンサルティング会社にて執行役員、事業部長、経営管理部長を歴任。2011年2月、株式会社JIN*を設立し、現在、代表取締役。南スーダンやウガンダのプロジェクトに従事。

*本誌122ページに企業情報あり

一方的に教えるのではなく、 現地の人に学ぶ

JICAは南スーダンの隣国ウガンダでもJICAの委託で生計向上支援プロジェクトを実施している。20年以上続いた内戦の影響で住民の9割が国内避難民キャンプで生活していた過去があるウガンダ北部は、内戦が終わり多くの住民が故郷に戻ったものの、開発が遅れていて貧困率も高い。

「収入向上のための農業振興を目指す本プロジェクトでは、高度な技術を伝えるために、枠組みを見るのではなく、人々を見て、彼らに共感しながら、かつプロとして、駆け引きしながら進めていきます。このやり方はJICAの他の社員にも共有されていて、ある若い社員はウガンダの農村で最初の3カ月間、ひたすら一緒に農作業をした。『最初からあれこれ伝えるのではなく、まずは現場をしっかりと観察し、謙虚な姿勢で人に話を聞く。近い距離で話せるようになるまで待ちます』。そうすることで、どんな銅を持っているのかなど農村の台所事情まで把握し、その知識を農業振興に生かすことができた。

「こちらが教えるのではなく、現地の人から学び、融合していくプロセスが大事」と語る大野さん。「南スーダンでも、ここまで寄り添ってくれたのはあなたたちだけだと言われたことがあります。彼らとは今でも付き合いがあるし、深くつながっています」。

相手と同じ歩幅で歩く

大野さんは自らを「開発“コンサルタント”ではなく、開発“ワーカー”」と言う。その理由は現地の人と一緒に汗を流す“ワーカー”として、同じ目線で共に歩くつもりで仕事をしているから。

「コンサルタントって、何かを教えるイメージがあるかもしれませんが、実際には現地の人や状況から学んで融合していくプロセスが大事。寄り添って理解した上で、仕事を進めていきます。大切なのは彼らをどう生かすか、どう変えるか。全て現地の人が原点です」

相手の視点からものを見るという意識は、どの仕事でも一貫している。今後は南スーダンの学校や地域で、スポーツを通して平和に対する意識の変化を起こす活動も進めていく。その準備として、今年のNUDで女性がスポーツ参画する時の障害やサポートしてくれた人を調査し、スポーツ参画を促進するための環境を整えることを目指す。

「スポーツに行き着くまでの障害要因を整理したい。男女共に、家にも外にも居場所がない子がいる。そういう子たちの居場所として、友達と話せて社会との接点となり、目標ができ、自分らしい生き方ができる、そのきっかけがスポーツであればいいと考えています。もしかしたら親御さんのところに行つて、ちよつとやらせてみていただけませんか、と話をすることが、ボールの蹴り方を教えるより重要かもしれない」

相手の状況を考え、同じ歩幅で歩くこの仕事に必要な力は？と聞くと、「相手の視点から物を見る能力、置き換える能力が必要。共感、共鳴、思いやる気持ちがあるといい仕事ができる」と大野さんは言う。

相手の視点から物事を見て、とことん人向き合うことが、平和をつくる近道なのかもしれない。



竣工した「Freedom Bridge」の全景。全長は560mを誇る(写真提供:大日本土木株式会社)

南スーダンを流れるナイル川に架けられた国内初のアーチ型鋼橋「Freedom Bridge」は、2022年5月に完成しました。日本の企業や国際協力機構(JICA)が携わった無償資金協力による南スーダンの橋梁工事について紹介します。

3度の工事中断乗り越え竣工

紛争やコロナ禍による3度もの中断を乗り越えて完成したこの橋は、同国の平和と自由、そして明るい未来への期待を込めて、現地の人々に「Freedom Bridge(フリーダム・ブリッジ)」と呼ばれている。開通式で同国キール大統領は「日本人と南スーダン人との友好の証であるこの橋を大事に使ってほしい」と述べた。

南スーダンは南北に流れるナイル川に分断されており、河川の兩岸をつなぐ橋は、50年前に首都ジュバ市に架設された「ジュバ橋」だけであった。老朽化したこの橋がウガンダやケニアからの物流を支える唯一の生命線という状況を改善するため、無償資金協力による全長560mの橋梁工事が計画された。工事は2013年6月に契約され、当初は2016年12月の完工予定だった。

工事を行ったのは大日本土木株式会社^{*1}。邦人スタッフに加え、フィリピン、エジプト、ベトナム、スリランカらの外国人スタッフ30〜50名も従事していた。紛争勃発時は商業便の運航が中止になったため、国連や米国チャーター便への同乗、JICAや同社によりチャーターされた航空便の利用などの対策をとったという。

南スーダン独立の象徴

現地の若手土木技術者育成にも貢献

エンジニアリング・コンサルタントは、株式会社建設技術インテリナショナル^{*2}が担当した。「Freedom Bridge」は当地の建設工事としては画期的な工法が用いられており、さらにランガー桁という鋼橋の組み立てとその水平移動も初めての工事であったという。プロジェクトの当初から常駐監理者として現場を統括してきた同社の梅田典夫さんは「現地で採用した南スーダン人の技術者や作業員にとっては、貴重な経験になったと思う。さらに、南スーダン人の素直な性格が、日本式の規律ある施工体制を受け入れてくれたことも、この工事が順調に施工できた要因だと思ふ」と語った。

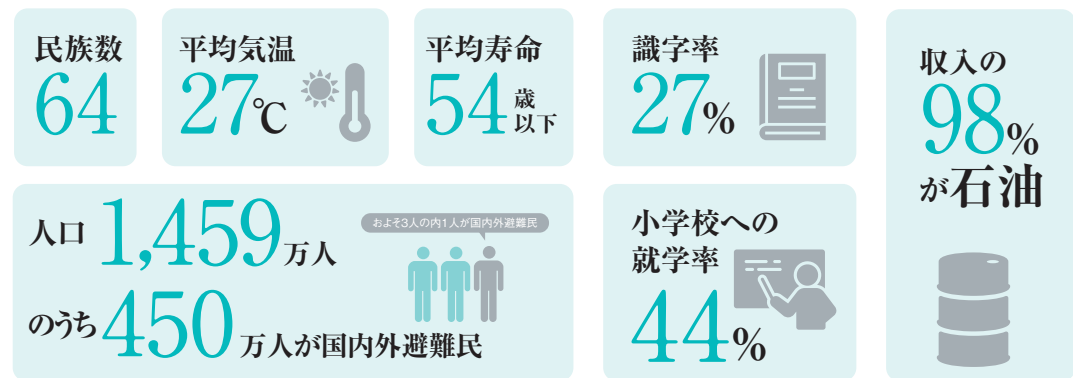
また工事とは別に、コンサルタントと施工業者は、ジュバ大学土木工学科の学生たちに対して、工事の進捗に合わせてその都度現場に招いて講義も行った。これは現地の若い土木技術者や学生たちの啓蒙、将来に対する指針にも大きな影響を残したのではないだろうか。

南スーダンは独立後も武装衝突が頻発し、現在も多くの難民や国内避難民を抱えている。経済発展や貧困の解消など多くの課題を乗り越えるための新たな国づくりを進める上で「Freedom Bridge」の役割が大いに期待されている。



大会後の記念撮影。後方中央が大野さん

数字で見る南スーダン



^{*1} 本誌150ページに企業情報あり
^{*2} 本誌108ページに企業情報あり